PHAYAOレポート 2008-14（～陸の孤島～）

スタディツアー参加者からの報告　（日刊新周南　連載記事から）

藤屋侃二さん(68)　下松市幸ヶ丘　　元KRY取締役ラジオ局長

新周南　2009年（平成21年）2月5日（木）　4

陸の孤島

タイ北部に住む山岳少数民族モンを訪ねた昨年九月の旅は、予定ではチェンマイのホテルに一泊したあとは①シャンティ山口が運営するモンの子どもたちのシャンティ寮に三泊。

②電気もない山奥の村でホームステイで三泊。

③モン族が運営するキャンプロッジ三泊。

となっていた。

①と③は予定通りだったが、②の電気も届いてない村でのホームステイは昨年七月から八月にかけて降った大雨で山奥はまだ道路事情が悪く、危険なため中止となり、低地のモン族の村でのホームステイに変更された。

正直に言えば電気のない村での生活は日本では絶対に体験できないことで、一番楽しみにしていただけに「多少無理をしても実施したらいいのに」と思ったのだ。

しかし③のキャンプロッジに向かって考えの甘さを痛感した。

ロッジにはトヨタの三五〇〇ccの四輪駆動車で行ったが、舗装された幹線道路から山道に入るとデコボコ道で車は大きく揺れる。

さらに奥地に入ると赤土の道路はぬかるんで車輪は空転し、車は左右に揺れてなかなか前に進まない。

私はペースメーカーを入れているからと、運転席の後ろの席に座らせてもらったが、後ろの荷台に乗っている人は体を支えるものもなく、悲鳴のような大声が聞こえてくる。

タイの雨期は六月から十月。この間は雨で山への道は通行不能になることがある。途中の村の車やバイクはどれもチェーンをつけている。

十五キロばかりの山道を一時間近くかけてやっとロッジに到着した時は「こんな無理してまでロッジに来なくてもいいのに」という気持ちになっていた。

山奥の電気のない村に行くには、もっとひどい道を通らなければならないという。すでにホームステイ中止を告げられた時のがっかりした気分は消え「中止は当然」ロッジの方も」という気持ちに変わっていたのだから、我ながら自分のいい加減さに苦笑した。

山への道がぬかるみ状態になると山のモンの村は陸の孤島となり、これが貧しさに拍車をかける一因になっている。

その悪路でも走れる強力な四輪駆動車は三百万円。日本の老婦人からのプレゼントと聞いてびっくりした。

以前は乗用車を使っていた。ある日、ぬかるみで動けなくなり、車を放棄して泥だらけになりながら歩いてロッジにたどり着いた。ちょうど日本から来ていた支援者の老婦人がその姿を見てプレゼントを申し出たという。

なかなかできることではない。彼女の名前から「あやみ号」と命名された車は泥だらけになりながら陸の孤島との心の架け橋にもなっている。

自分も傍観者にならず、小さなことからでも実行する者にならなければと心に誓った。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

雨期、山への道はぬかるみ状態

バイクもチェーンをつけないと進めない